

接続詞butで説明するThe Tale of Peter Rabbitの物語構造

| | |
|--------|---|
| 著者名(日) | 中本 恭平 |
| 雑誌名 | 共立女子大学文芸学部紀要 |
| 巻 | 64 |
| ページ | 17-27 |
| 発行年 | 2018-03 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1087/00003201/ |

接続詞 but で解明する *The Tale of Peter Rabbit* の物語構造

なか もと きょう へい
中 本 恭 平

1 要 約

本稿⁽¹⁾は、逆接の接続詞 but によって作り出される反義関係を利用して、イギリスの作家 Beatrix Potter が 1902 年⁽²⁾に出版した *The Tale of Peter Rabbit* の物語構造を解明する。そのため、第 2 節では、接続詞 but の意味を解説する。特に、but の前後の反義関係がしばしば含みの意味（以下では語用論の用語である「推意」を用いる）レベルで成立することを明らかにする。第 3 節では、*The Tale of Peter Rabbit* が幼児向けの絵本でありながら、スリルに満ちた物語であることを確認する。そして第 4 節では、この物語で用いられている接続詞 but をすべて拾い出し、その前後の反義関係を確認し、その結果から、この物語のスリルに満ちた物語構成を明らかにする。

本稿では、The Project Gutenberg EBook によってインターネット上に公開されている *The Tale of Peter Rabbit* のテキストを使用する⁽³⁾。

2 接続詞 but の意味⁽⁴⁾

逆接の接続詞 but は *OALD* (p. 201)⁽⁵⁾ で ‘used to introduce a word or phrase that contrasts with what was said before’ と定義されているように、対比関係を表す。

次の 2 例では「好き⇔好きでない」が対比されているが、いきなり (2) が示されると (1) より不自然であることからわかるように、対比には何らかの意味的共通点が必要である。

- (1) I like cats, but I don't like dogs.
- (2) I like cats, but I don't like baseball.

(1)では愛玩動物という共通点が感じられるのに対し、(2)では猫と野球を結びつける共通点がすぐには思いつかず不自然である。ただし、たとえば、休日に猫と遊ぶほうが野球をするより楽しいという人が「どうして野球をしないのか」という質問に対して答えているような場合なら「余暇の過ごし方」という共通点が生じ、自然となる。

次に、対比とは but の前後で反義関係が成立することを意味する。上記(1)では like と not like が反義関係となっていた。しかし、このように反義関係が必ずしも表現されているとは限らず、しばしば推意レベルで反義関係が成立する⁽⁶⁾。理論的には、次の4通りが考えられる。日本語訳の()部分が推意、下線部が反義関係である。

[パターン1] 反義関係が明確に表現されている場合

(3) = (1) I like cats, but I don't like dogs.

猫が好き⇔犬は好きでない (すなわち嫌い)

[パターン2] but の前が推意となっている場合

(4) I like cats, but I don't have one as a pet.

猫が好き (だから飼っているはず) ⇔ (実際には) 猫は飼っていない

[パターン3] but の後が推意となっている場合

(5) I have a cat as a pet, but Mary has a dog as a pet.

私は猫を飼っている⇔メアリーは犬を飼っている (から猫は飼っていない)⁽⁷⁾

[パターン4] but の前後が共に推意となっている場合

(6) I like cats, but I live in a small apartment.

猫が好き (だから飼っているはず) ⇔ (実際には) 小さなアパートに住んでいる
(から、飼うことができないから飼っていない)

以上の例から明らかなように、因果関係の結果に相当する部分が明示されず、推意として暗示されることが多い。(6)のように、因果関係が二段階(あるいはそれ以上)の連鎖になっていることも珍しくない。

逆接の接続詞 but のもっとも重要な役割は、対比という手段を用いて、but の後の意味を強調することである。これは、but の前後を入れ替えてみるとよくわかる。

(7) = (1) I like cats, but I don't like dogs.

(8) I don't like dogs, but I like cats.

(7)では否定的ニュアンス、(8)では肯定的ニュアンスの残る文となる。

筆者および本稿の想定読者の母語である日本語の「しかし」でも同じことが言える。直観が働きやすい日本語の例で比較するとさらによくわかる。

(9) 来々軒のラーメンはおいしい。しかし、店が不潔だ。

(10) 来々軒は不潔だ。しかし、ラーメンはおいしい。

直観的には、(9)の帰結として「来々軒には行かない」、(10)の帰結として「来々軒に行く」が予想される。これはよく知られた「なるほど A である。しかし B である」という構文に等しい。推意を補うとそれぞれ次のようになる。

(9') (なるほど) 来々軒のラーメンはおいしい (ということは認める)。しかし、不潔だ (から行かない)。

(10') (なるほど) 来々軒は不潔だ (ということは認める)。しかし、ラーメンはおいしい。(すなわち、不潔さを我慢してでも行くだけの価値がある。だから行く。)

(9)(10)の帰結として次のようなものは、通例、不自然に感じられる。

(9'') 来々軒のラーメンはおいしい。しかし、不潔だ。だから来々軒に行く。

(10'') 来々軒は不潔だ。しかし、ラーメンはおいしい。だから来々軒には行かない。

不潔な店を好むとか、おいしいラーメンは敬遠するといったような状況でないと、不自然である。

以上をまとめると、逆接の but (「しかし」も同様) は次の意味機能を持っている。

- (a) but の前後で共通の意味基盤が存在することを前提とする。
- (b) but の前後で反義関係が成立する。反義関係は推意レベルで成立することが多い。
- (c) but の後の意味が強調される。

3 *The Tale of Peter Rabbit* の物語展開

ここでは、「ウィキペディア」の「ピーターラビットのおはなし」の項⁽⁸⁾の「あらすじ」を引用するに留める。

この物語は擬人化されたうさぎの家族の話である。寡婦となった母親うさぎが子供たちに、お父さんは畑に入り、マグレガーさんにつかまりパイにされたことを伝え、「マグレガーさんの畑に入らないように」と忠告する。子供のうち3匹の娘のうさぎたちは母親のいうことを聞いて、畑には入らずブラックベリーを摘みに行ったが、いたずら好きのピーターはマグレガーさんの畑に入り、おやつに畑の野菜を食べてしまった。野菜を食べ過ぎてお腹が痛くなったピーターは、パセリを探しに行った。しかしピーターはマグレガーさんに見つかってしまった。ピーターはジャケットと靴が脱げるほどの勢いで逃げた。小屋にあったじょうろに隠れたが、マグレガーさんに見つかってしまう。しかしピーターは何とか逃げ切り、ついにマグレガーさんはピーターを見失った。マグレガーさんが飼っている猫の後ろをそっと通り過ぎ、遠くからピーターが最初に入った門を見つけた。しかしながらそのときピーターはまたマグレガーさんに見つかってしまい、追いかけられる。ピーターは一目散に逃げ、門に引っかかってものがくが、なんとか外に出ることに成功した。逃げ切ったものの、ピーターはジャケットと靴を畑に忘れて行ってしまった。ジャケットと靴は、マグレガーさんの畑の案山子につるされることとなった。家に帰るとピーターは具合が悪い様子だったので、お母さんはベッドまでピーターを連れて行って寝かしつけた。ほかの行儀のよい子供たちは夕食は豪華にパンと木苺を食べ、ミルクを飲んだが、ピーターはカモミールのお茶を飲んだ。

この「あらすじ」には不適切な箇所があるので指摘しておく。

まず、「お父さんは畑に入り、マグレガーさんにつかまりパイにされた」とあるが、原文は Your Father had an accident there; he was put in a pie by Mrs. McGregor. となっている。there はマグレガーさんの畑を意味する。畑で「事故に遭遇した」と母うさぎが述べているだけで、「つかまった」とは明言していない。つまり、この「つかまった」そして「殺されて、肉にされて、パイの食材にされた」ことが推意となっているのである。当時のイギリスでは、おそらくうさぎの肉を用いたパイがよく食べられていて、幼い子供でもそのことを知っていたのだと推測できる。そうでないと、このような推意の取り出し

を子供に期待することはできないからである。「つかまって殺された」ということを露骨に表現せず推意、つまり含みの意味にしてあるところも、本作品のひとつの特徴と言える。これについては、後述する。

次に、「門に引っかかってもがくが」とあるが、原文では He slipped underneath the gate, and was safe at last in the wood outside the garden. となっており、「引っかかってもがく」という描写はない。

ジャケットと靴は「畑に忘れて行っ（た）」というより、回収不能で残して行ったとするほうが妥当であろう。

物語末尾は

His mother put him to bed, and made some camomile tea; and she gave a dose of it to Peter!

“One table-spoonful to be taken at bed-time.”

But Flopsy, Mopsy, and Cotton-tail had bread and milk and blackberries for supper.

となっており、ピーターの描写が先で、他の子供たちの描写が後の順となっている。この順序が持つ意味については、後述する。

以上、本作品がスリルに満ちた物語であることを確認した。

4 *The Tale of Peter Rabbit* 本文で but が用いられている文の分析

本作品では but は合計 15 回用いられている。そのうち、接続詞でない 1 例⁽⁹⁾を除く 14 例について、but の前後でどのような反義関係が成立しているかを調べていく。○付き数字は出現順序を表す。第 2 節と同じく、日本語訳の（ ）は推意を補った部分である。下線部分で反義関係が成立している。

① you may go into the fields or down the lane, but don't go into Mr. McGregor's garden.

野原・裏道へは行ってもよい（なぜなら安全であるから）

⇨マグレガーさんの畑には行ってはいけない（なぜなら安全ではないから）

② Flopsy, Mopsy and Cotton-tail, who were good little bunnies, went down the lane to

gather blackberries;

But Peter, who was very naughty, ran straight away to Mr. McGregor's garden,

フロプシーたちはよい子だったから裏道へ行った（からマグレガーさんの畑へは行かなかった）

⇨ピーターは（よい子ではなく）悪い子だったからマグレガーさんの畑へ行った

③ And then, feeling rather sick, he went to look for some parsley.

But round the end of a cucumber frame, whom should he meet but Mr. McGregor!

パセリを探した（からパセリが見つかるはずだ）

⇨マグレガーさんに出くわした（からパセリは見つからなかった）

（別解釈）ピーターが探したのは（マグレガーさんではなく）パセリだった

⇨ピーターが見つけたのは（パセリではなく）マグレガーさんだった

④ Mr. McGregor was on his hands and knees planting out young cabbages, but he jumped up and ran after Peter, waving a rake and calling out, "Stop thief!"

マグレガーさんは四つん這いでキャベツを植えていた（からピーターにとっては安全である）

⇨マグレガーさんは飛び上がってピーターを追いかけた（からピーターにとっては安全でない）

⑤ Peter gave himself up for lost, and shed big tears; but his sobs were overheard by some friendly sparrows, who flew to him in great excitement, and implored him to exert himself.

ピーターは（マグレガーさんにつかまって）命を落とすとあきらめて涙を流した

⇨スズメが泣き声を聞いて飛んできて、スズメに励まされ（て希望を持ったからあきらめなかった）

⑥ Mr. McGregor came up with a sieve, which he intended to pop upon the top of Peter; but Peter wriggled out just in time, leaving his jacket behind him,

マグレガーさんがふるいでピーターをつかまえようとした（からつかまっただ）

⇨ピーターはかろうじて体をくねらせ（てマグレガーさんから逃れたからつかまらなかった）

⑦ He found a door in a wall; but it was locked, and there was no room for a fat little rabbit to squeeze underneath.

ピーターはドアを見つけた（からそこから外へ逃げられるはずだ）

⇨ドアは鍵が掛かっていた（から外へ逃げられない）

⑧ Peter asked her the way to the gate, but she had such a large pea in her mouth that she could not answer.

ピーターはネズミ⁽¹⁰⁾に門への行き方をたずねた（から教えてくれるから外へ逃げられるはずだ）

⇨ネズミは答えられなかった（から教えてくれなかったから外へ逃げられない）

⑨ Then he tried to find his way straight across the garden, but he became more and more puzzled.

ピーターは畑をつきつて（外へ出る）道を探した（から外へ逃げられるかもしれない）

⇨ピーターは（どう行けば外へ出られるかわからなかったから）ますます困惑した（から外へ逃げられない）

⑩ A white cat was staring at some goldfish; she sat very, very still, but now and then the tip of her tail twitched as if it were alive.

ネコはじっとして（動かなかった）（から金魚にとっては安全である）

⇨ネコの尻尾の先はときどきぴくっと動いた（から金魚にとっては安全ではない）

⑪⑫ He went back towards the tool-shed, but suddenly, quite close to him, he heard the noise of a hoe – scr-r-ritch, scratch, scratch, scratch. Peter scuttered underneath the bushes.

But presently, as nothing happened, he came out, and climbed upon a wheelbarrow, and peeped over.

⑪ ピーターは物置小屋へ戻ってきた（から安全である）

⇨突然、近くで物音がした（から安全でない）

⑫（安全でないから）ピーターは藪の下（の安全な場所）へ素早く逃げた（すなわち藪の下だけが安全）

⇔何も起こらなかった（から安全であることが確認されたから藪の）外へ出た（すなわち藪の下だけが安全ではなく、外も安全）

⑬ Mr. McGregor caught sight of him at the corner, but Peter did not care.

マグレガーさんはピーターを見つけた（からマグレガーさんにつかまるはずだ）

⇔ピーターは（マグレガーさんに見つかっても）気にしなかった（からマグレガーさんから逃れるから、マグレガーさんにつかまらない）

⑭ His mother put him to bed, and made some camomile tea; and she gave a dose of it to Peter!

“One table-spoonful to be taken at bed-time.”

But Flopsy, Mopsy, and Cotton-tail had bread and milk and blackberries for supper.

お母さんはピーターに（おいしくない）カモミール茶を与えた

⇔フロプシーたちは（おいしい）パンとミルクとブラックベリーを食べた

以上の結果を、表にまとめた。○付き数字は上記分析におけるそれと一致している。
but の左右の○印は好ましい意味内容、×印は好ましくない意味内容を意味する。右端の欄は but によって強調されて出てくる意味合いである。

- | | | | | |
|---|---|-----|---|---------|
| ① | ○ | but | × | 危険、不安 |
| ② | ○ | but | × | 危険、不安 |
| ③ | ○ | but | × | 身の危険 |
| ④ | ○ | but | × | 身の危険 |
| ⑤ | × | but | ○ | 希望 |
| ⑥ | × | but | ○ | 危険からの脱出 |
| ⑦ | ○ | but | × | 身の危険 |
| ⑧ | ○ | but | × | 身の危険 |
| ⑨ | ○ | but | × | 身の危険 |
| ⑩ | ○ | but | × | 危険、不安 |
| ⑪ | ○ | but | × | 身の危険 |
| ⑫ | × | but | ○ | 安心 |
| ⑬ | × | but | ○ | 危険からの脱出 |
| ⑭ | × | but | ○ | （罰と）褒美 |

この表から、第3節で確認したスリルに満ちた物語展開が鮮明に浮かび上がった。冒頭の4箇所の but で不安とピーターの身に迫る危険が描かれている。しかし、そこで物語が終結するわけではなく、⑤⑥でいったんピーターは解放される。しかし、そのままピーターが家へ逃げ帰れるわけではない。⑦⑧⑨の三連続で、畑の外へ出られるようでなかなか出られない焦燥感が表現される。

そして、もっとも不気味な効果を演出しているのが⑩である。白猫が狙っているのは池の中の金魚であり、ピーターではない。しかも、白猫はピーターに気づいていない。したがって、ピーターにとってはこの段階では危険性はない。そしてピーター自身も次の行動を取る。

Peter thought it best to go away without speaking to her; he had heard about cats from his cousin, little Benjamin Bunny.

従弟から猫についてあれこれ聞いていたから、この白猫には関わりを持たないことにしたと述べられているが、ここでも、猫についてうさぎにとって恐ろしい情報、具体的には猫がうさぎを襲い、さらには殺して食べてしまうというような意味合いを推意として読者が読み取ることが、作者によって期待されていると言ってよかろう。「つかまえて、殺す」という露骨な表現が用いられず推意、つまり含みの意味になっている点は、冒頭の父うさぎに関する母うさぎの台詞と同趣旨である。

このように、ピーターにとってはさしあたって何の危険性もない白猫ではあるのだが、「金魚にとって危険（だからピーターにとってもマグレガーさんにつかまる危険が降りかかる）」という非科学的な因果関係を読者に連想させる。猫は身じろぎもしないが、尻尾だけが時折それ自体が生き物であるようにびくっと動くという描写に、読者、特に幼い読者の恐怖心を煽る効果が十分にあると言えよう。

この後、⑪でいよいよピーター自身に直接危険が降りかかる可能性があることが描写され、読者の恐怖心は最高潮に達すると言える。しかし、この後、「○ but ×」から「× but ○」へと転換する。この流れは、ピーターが無事巣穴に戻ってからも続いている。前節で指摘したように、末尾は母親の言うことを聞かなかったピーターが罰を受け（×）、言いつけを守ったフロプシーたちがおいしいご馳走にありつく（○）という順序で物語が締めくくられている。もしここで、この順序が逆であったらどうなるか。

Flopsy, Mopsy, and Cotton-tail had bread and milk and blackberries for supper.
But Mother put Peter to bed, and made some camomile tea; and she gave a dose of
 it to him! “One table-spoonful to be taken at bed-time.”

but の後が強調されるので、教訓が強く印象づけられ、文字通りカモミール茶のおそらくは苦くておいしくない後味が残る作品となっていたであろう。作者が上の表の構造を意図して「× but ○」の終わり方にしたのかどうかはわからない。しかし、結果論として、おいしいご馳走を食べたという好ましい意味内容で締めくくられることにより、やわらかい印象の残る作品となっている。上述した「つかまえて、殺す」という文言をいっさい用いず、すべて含みの意味（推意）にしてあることと相俟って、幼児にとっては手に汗握る物語展開ではあるのに、グロテスクなレベルでの恐怖心を植え付けない作品となっている。

5 まとめ

以上、本稿では逆接の接続詞 but により作り出される反義関係を利用することによって、*The Tale of Peter Rabbit* の物語構造を解明した。but に着目することなく読んでも、ピーターが一度は捕獲されそうになりながら、間一髪逃げたものの、その後なかなか畑から脱出できないことは読み取れるであろう。しかし、but がもたらす反義関係を、推意レベルにまで掘り下げて分析することにより、前半の不安感、後半の焦燥感が鮮明に浮かび上がった。そして、特に白猫の場面では、but に着目せずに読むと、この部分の持ち味はおそらく十分には味わえないだけでなく、ストーリーがやや脱線している印象が残り、気にせず読み飛ばしてしまう恐れがある。しかし、but の反義関係に着目することで、ピーターの身にも危険が差し迫っているのではないかという不気味さを醸し出していることが読み取れた。

最後は緊張感からの解放とでも言うべく、「× but ○」の連続で物語が締めくくられており、重圧感が読後に残らないようになっている。

「深読み」とは何か。それは、暗示されている推意まで読み取ることを意味する。but の反義関係を確認するためには、深読みは必須である。もちろん、but を含む文の解釈だけにとどまらず、おおよそ文章を読む際には、推意の読み取りは必須である。コミュニケーションの核心は、書き手と読み手（あるいは話し手と聞き手）の間での推意の受け渡しにある。

注

- (1) 本稿は、筆者が2014年8月24日に行った、共立女子大学オープンキャンパス模擬授業「英文法で読む *The Tale of Peter Rabbit*: 逆接の but に着目して」を基にして執筆したものである。
- (2) 1900年に私家版として出版された後、1902年に公刊されている（斎藤勇他編（1985）『英米文学辞典 第三版』研究社出版 p. 1060）。
- (3) <http://www.gutenberg.org/files/14838/14838-h/14838-h.htm>（2017年8月1日検索）
- (4) 本節は次の文献を大幅に加筆修正したものである：中本恭平（2015）「But me more buts!」数研出版『Chart Network』No. 75, pp. 5-9.
- (5) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 8th ed. (2010) Oxford University Press.
- (6) 以下の *The Tale of Peter Rabbit* の分析においても、そのほとんどが推意レベルでの反義関係となっている。
- (7) この文の反義関係は「私が飼っているのは猫である⇔メアリーが飼っているのは（猫ではなく）犬である」であるとも考えられる。
- (8) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%94%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%83%93%E3%83%83%E3%83%88%E3%81%AE%E3%81%8A%E3%81%AF%E3%81%AA%E3%81%97>（2017年8月1日検索）
- (9) But round the end of a cucumber frame, whom should he meet but Mr. McGregor! における後者の but は除外する。
- (10) 原文の her は (a)n old mouse を指している。